

韓国教会による世界宣教の過去、現在、将来の展望

高見澤栄子

序

2018 年の Korea Research Institute for Missions の統計によると韓国人宣教師の数は世界の 146 カ国に 21,378 名となり、韓国はアメリカについて世界第二の宣教師派遣国となった¹。困難な地域や未伝道地域に積極的に取り組んできた韓国人宣教師の活躍は、世界のキリスト教維持と発展に大きな貢献をしてきた。本論文はこの現象について、ここに至った歴史的経過と現在の韓国人による世界宣教への取り組み、および近年直面している宣教の課題と、将来の展望などを紹介するものである。

韓国の世界宣教の分野での活躍は、韓国教会の発展を無くしてはあり得ない。それで、まず韓国キリスト教の略史を、最初に韓半島に到着したカトリックの略史から、その後に韓国の宣教活動の担い手となったプロテスタントの歴史をふりかえりながら、海外宣教が韓国内でどう始まり、今日までどのように拡大したかを概観する。また、その中でどのような問題に今日の韓国宣教運動は直面したのか、その代表的課題とその将来の対策について考える。

¹ Steve Sang-Cheol Moon, "Mission from Korea 2019: Support Raising," *International Bulletin of Mission Research* 43, no.2 (2019), 188. Korea World Missions Association は 27,436 名が 170 カ国で宣教活動をしているという統計をだしている。Jaechan Park & Yeara Ahn-Park, "KWMA: Korean Churches Dispatched 27,436 Missionaries to 170 Countries Last Year," *The Kukmin Daily*, January 14, 2014, accessed July 25, 2019, <http://www.kukmindaily.co.kr/article/view.asp?page=&gCode=7111&arcid=0012048781&code=71111101>.

カトリック教会の黎明期

朝鮮半島に最初に足を踏み入れた宣教師は、日本から秀吉軍が朝鮮に侵攻したおりにキリシタン大名の小西行長の要請で従軍司祭として同行した、ポルトガル人のグレゴリオ・セスペデスだった²。しかし彼の働きはあくまでも日本の従軍司祭として、当時苦境を強いられていた日本人軍人が対象であり、韓国人の魂の救いという宣教の意図は見られなかった。むしろ、十字架を描き込んだ旗の下で侵略を進める日本軍と共にいる司祭が、現地の民衆の救いのために働き、民衆と接点を持つことなどはありえなかった。

後に実際に福音を韓国の地にもたらしたのは 1784 年に平壤に教会を建てた李スンフンであった。1777 年、北京に西学と呼ばれたキリスト教を、独自に学んだ韓国人信仰者達の共同体ができ、その内の一人が李スンフンであった。このように最初に福音を韓国にもたらしたのは韓国人だったので、正確には宣教師の働きとは言えないが彼とその仲間達によって 1785 年からソウルのミョンドンで始まった礼拝は 5 年以内に 4,000 人の規模となる勢いであった。この時礼拝所となったのは金ボムウ（トマス）の家で、彼はこの後に儒教家や両班達の迫害に遭い韓国の最初の殉教者となった³。

この後カトリックへの迫害は勢いをまし、1794 年に中国人の周ムンモが布教を始めたが、激化する迫害の下で殉教した。韓国人最初の司祭となった金テゴンは上海から帰国してカトリックを布教したが、彼も儒教者の強い反対にあって 103 人の信徒とともに処刑されている。20 年後にはフランス人司祭が来韓して布教を続けたが、丙寅教獄の事件で司祭 9 名と信者 8,000 人が処刑され、教会や教理文書などの焼き討ちなど、韓国は西学を閉め出す鎖国の姿勢をとった。1800 年代の前半はこのような過酷な迫害によってカトリック教会は、初期に見られた勢いを吹き返す余地のない状況であった⁴。

² 閔庚培『韓国キリスト教史』澤正彦訳（日本キリスト教出版局、1974 年）33-37 頁

³ 前掲書、43-45 頁。現在はこの場所にカトリック大聖堂が建っている。

⁴ 前掲書、68、69 頁

プロテスタント教会の創始期

プロテスタント宣教は 1883 年メソジスト教会の宣教師ヘンリー J. アペンゼラー、ホレイス G. アンダーウッドが韓国に派遣されたことから始まった。これは閔ヨニク韓国全権大使が米国でガウチャー大学の学長と出会ったことがきっかけであった。実はこの前年にメソジストの宣教師ロバート・マックレイが高宗に宣教許可を要請したが、その時は宗教的な活動は許されず病院と学校の設立の許可のみに留まっていた⁵。しかしながらアペンゼラーとアンダーウッドへの許可によって、ホレイス N. アレンは朝鮮初の近代医療機関である広恵院（済衆院）、現在の延世大学付属病院を建て⁶、アンダーウッドは「培材学堂」という男子教育機関を、メアリー F. スクラントンは梨花大学の女子教育機関を設立した。アペンゼラーは 44 才の若さで、海岸でおぼれている朝鮮人少女を救うために自らが犠牲になったが、その後は娘のアリス R. アペンゼラーが梨花大の学長を務めながら宣教活動を続けた。息子のヘンリー D. アペンゼラーも培材学堂の校長として朝鮮の教育に貢献している。宣教師達が教育機関の他にも孤児院の開設など社会貢献したことは、韓国人の心を捉えてキリスト教により好意的になることに貢献した。

この時期の韓国におけるプロテスタントの広がり、初期段階での聖書の普及によるところが大きい。最初の宣教師が仁川に上陸したおり、1887 年に中国の瀋陽でジョン・ロス宣教師（スコットランド長老派）が韓国語に訳した聖書をもって入ってきたことは良く知られている。その後の禁教時にもギュツラフやトマスは聖書の頒布を行ない、韓国人信徒たちも聖書の売書人としてソウルやソレ地方で流布活動している。閔庚培は、韓国人の聖書への熱心がプロテスタントの初代教会の特徴だと述べている。「このようにイエスを信じようと心を決めた人達は聖書を精読し、その聖書のことばどおりに生きようと務めた。聖書を共に読んでゆく『査経会』が、韓国ほど盛んなところは珍しかった⁷。」

⁵ 1998 年に「因伝教事」という宣教師が布教のために各地を訪れる査証が発給されるようになった。

⁶ 後にアメリカの事業家セブランスが建設に貢献したので、セブランス病院ともよばれている。

⁷ 閔、91 頁

平壤のリバイバルと韓国人宣教の萌芽

1907年に起きた平壤のリバイバルは韓国教会の発展と宣教活動の開始として重要な出来事であった。政治社会的側面としては、1894年に東学革命がおき、日清戦争に勝利した日本軍は韓国にも手を伸ばし、景福宮を包囲して韓国軍を武装解除し、翌1895年に韓国の閔妃をその寝殿内で暗殺するという事件を起こした。これは韓国国家の脆弱性が曝露された事件であり、1904年には日韓議定書の調印が強要され、1906年には日本総督府が伊藤博文を初代統監として設置し、最初の戸籍調査が実施され、日本の韓国支配が進められた。

このような事態が起きた折りに、韓国には依るべき在来宗教が不在だったため、当時全国規模で活動を展開していたキリスト教会が国民の愛国心的意識を集める役割を担ったことが、キリスト教会の拡大の一つの要因として挙げられる。加えて1884年以来、韓国内で活動していた北米からの宣教師たちが、韓国人の立場に立って日本軍の襲撃と蛮行を世界に知らしめるなど、韓国人の立場を擁護しようとしたことも、韓国の民衆にキリスト教会は韓国の愛国心の担い手であるという確信を強める機会となった。しかし、このような理由から、日本軍の攻撃は集中的にキリスト教会に向けられるようになったのである。

宣教的側面としては、1890年にネビウスによる3セルフの「自給、自立、自活動」⁸、の宣教方策を取り入れたことで、韓国教会の実力が着いてきたことがあげられる⁹。また長老会の連合が「宣教公議会」を形成し、それぞれに活動していた宣教団体の監督機関の役割を担って、宣教地域の分割等を効果的に進めたことも教会が効果的に拡張した原因だったろう¹⁰。しかし、日本の植民地支配という危機に直面した時、宣教師をはじめ教会のリーダーおよび信徒たちは自らの信仰を自省する機会をもった。宣教師のR.A.ハーディが、自らの宣教の動機など悔い改めをした時、教会の指導者達や信徒の間にリバイバルの炎が起こった。それが全国に飛び火し、全国的なリバイバル運動となったので

⁸ この宣教の理論は、始めヘンリー・ベンとルース・アンダーソンによって提唱され、ネビウス夫妻がこれを韓国教会にもたらしたため、ネビウス方式と呼ばれる。

⁹ 特に勤労階級や婦女子の伝道と教育、都会だけでなく地方に焦点をあわせた活動、そのためにもわかり易い聖書の学び、文書の韓国語版の政策、自給の教会で社会貢献する伝道を強調し、交わりを重視した弟子訓練の徹底などが再確認された。

¹⁰ 閔、95-96頁

ある¹¹。日帝下の迫害の下であつてもリバイバルの勢いの中でキリスト教徒の伝道の熱意は衰えることなく、むしろ更に広まっていったのである。閔は当時の教会の宣教への熱意は、新しい改宗者が洗礼を受ける際に、かれらの隣人への宣教意識を確認するほどであったと記録している¹²。この平壤リバイバルの中で起きた宣教の熱意は、国内だけに留まらず海外にまで向けられていった。独老会は宣教部を設け、1907年には済州島、1909年にはロシアのウラジオストク、中国の満州に宣教師達が送られたのである。東京の韓国系移民のために韓スクジン宣教師が派遣されたのもこの勢いの中であつた。このように韓国教会が初めて宣教師を送り出すのを、エリザベス・キイツ女史は、「韓国こそ非キリスト教国からキリスト教に転向し、且つ宣教師を送り出す国となった世界で最初の国家だ」と述べている¹³。

日帝支配と激化する迫害

このリバイバルの火は、1910年に起きた日韓併合という国家の試練の中で更に拡大していった。それは前述のとおり、キリスト教会が韓国人の愛国心を結集する場となり、人権と国家、及びキリスト教の存続のための砦の役割を果たしながら、反日運動の担い手となったことが大きい¹⁴。1919年の3.1独立運動はその象徴的な出来事であった。独立宣言の署名者33人のうち16名がキリスト者で、この運動は基本的には非暴力の独立運動だった。しかし一部の暴徒による事件がきっかけとなって、総督府による全国的な運動の鎮圧が行われ、それは教会、ミッションスクール、神学校などの迫害へと激化した。水原市の堤岩里教会など完全な破壊を受けた教会は17、一部破壊65教会、また、逮捕された牧師・長老は134名、信徒は3,804名、その内の死亡者は47名と報告されている。キリスト者以外も数えると、死者7,509名、負傷者15,961名、逮捕者48,948名であった¹⁵。この時投獄された信徒達は、獄中でも未信者の囚人

¹¹ 前掲書、108頁

¹² 前掲書、101頁

¹³ 前掲書、114頁

¹⁴ 前掲書、108頁

¹⁵ 前掲書、127-128頁

達に積極的にキリストを証した¹⁶。「殉教者の血潮が韓国教会の成長の種」といわれる通り、この大きな殉教の犠牲は韓国の教会成長の土台であった。

3.1 運動の後、日本は満州事変、日中戦争、太平洋戦争へと大東亜共栄圏への侵略を進めると同時に、韓国内の植民地支配の手も強めた。軍隊 20 万人、警察 35,000 人を送って統制を強めつつ、42 の神宮と 108 の神祠を建立し、東方遙拝を強要し、皇国臣民誓詞の斉唱や創氏改名、日本語の常用や日章旗への敬礼や掲揚を強要したのである¹⁷。この間日本のキリスト教会は、富田満牧師を通して韓国キリスト者へ、神社参拝は宗教行為ではなく政治行為だと、説得を試みた。しかし、これに同意しない朱キチヨル牧師ら 50 名余りは敢えて殉教の道をたどった。しかし、これもまたキリスト教が命を捨てるに値する信仰だという証しの機会であった。国家的な苦難の道をとった韓国の教会は、このようにナショナリズムと融和しながら教会の成長を見たのである。一方、日本の教会はというと、戦中の三教会同に見られるように、日本の神道のナショナリズムに妥協して大東亜共栄圏運動に同乗し、アジア各地への侵略を進めたのである。日本のキリスト教会が韓国の植民地支配とキリスト者の迫害について教団ごとに悔い改めを表明するまで 50 年の月日がかかった¹⁸。

解放と朝鮮動乱、その後の発展

ゆえに、1945 年の日本からの解放は、韓国内のキリスト教会の解放とも言えるものであった。しかしそのわずか 5 年後に南北の朝鮮動乱が始まり、再び韓国教会は共産党の下に 3 年余りの苦難の時期を過ごさなくてはならなかった。この間、教会の成長はしばらく阻まれたが、これもまた後の韓国の教会の成長の原動力となる要素を持っていた。第一に北からのクリスチャン避難民の流入である。彼らは南に来てからも積極的に教会開拓をし、熱心な伝道によって教会の成長に貢献したのである。難民として韓国の各地に散っていった信徒

達による伝道は、初代教会の迫害下で福音を広めた名も無い信徒たちを彷彿とさせる。第二には共産軍によるキリスト教徒の迫害を体験した韓国が、韓国を応援したアメリカ人の宗教であるキリスト教に心を開き易かったことがあげられる。第三には日帝時代と南北戦争によって韓国の伝統が崩れていたことも新しい価値観や宗教を取り入れる素地の一つとなったと考えられる。また、第四に、迫害下でよく見られる霊性の深まりが考えられる。危機的な状況の中で福音がより純粋に捉えられ、悔い改めや再献身が起こりそれがこの時期のリバイバルに繋がった。また、特にこの時期にキャンパスクルセードや、YFC、国際ナビゲーター、University Bible Fellowship、聖書クラブなど、若者の間に広がったキリスト教団体による次世代への働きが展開されたことが、この後の教会成長の要因となったと考えられる。

表1. 1960 年代の韓国教会の成長¹⁹

	国民総人口	プロテスタント 信徒数	人口比率	教会数
1959 年 12 月	21,501,386	1,324,258	6.15 %	639
1969 年 8 月	30,869,039	2,900,478	9.38 %	11,519

1970 年からの飛躍的発展

1970 年になると、信者数は 3,193,000 名、人口比の 10.1% となり、初めて 1 割を越えた。この後、更なる成長をし、1981 年には人口の 19.8%、ほぼ 2 割がキリスト者という状態になった²⁰。この時期の教会成長の原因として考えられるのは、社会面では、社会の発展に伴う都市化で人々が新しい宗教であるキリスト教を受容しやすかったこと、また 1988 年のオリンピックの開催を通して韓国経済の発展と国際外交の改善、および高等教育の充実があげられる²¹。

¹⁶ 尾形守『日韓教会成長比較：文化とキリスト教史』（ホープ出版、1997 年）135 頁

¹⁷ 前掲書、153-157 頁

¹⁸ 当時の日本のキリスト教のリーダー達の何人か、内村鑑三や賀川豊彦などは平和主義を唄ったが、これは国全体の体制を変えるにはいたらなかった。

¹⁹ 尾形、212 頁を参考。

²⁰ 尾形、228 頁に引用されている James Huntly Grason, *Early Buddhism and Christianity in Korea* (Leiden: E. J. Brill, 1985), 126 の統計表による。

²¹ Timothy K. Park. "Missionary Movement of the Korean Church" in *Mission History of Asian Churches*, ed. Timothy K. Park (Pasadena: William Carey Library, 2011), 158.